

3 考古学の視点から

元・沖縄県立博物館・美術館館長
／沖縄県立芸術大学名誉教授

安里 進

一九四七年生。考古学・琉球史。『琉球の王権とクスク』（山川出版社）他。

彦山丸事件と朝鮮人軍属の埋葬

今年二月、「本部町健堅けんげんの遺骨を故郷に帰す会」の依頼で、朝鮮人を含む沖縄戦犠牲者埋葬地の発掘調査に参加した。

発掘の目的の一つは、強制連行されて戦死した朝鮮人の遺骨を考古学の手法

で取り上げて、DNA鑑定のおかげで故郷に帰すことだ。韓国から考古学の発掘調査団が参加し、私も、沖縄側の発掘指導者として関わった。

彦山丸事件は、地上戦が始まる前の一九四五年一月に起きた。健堅集落に近い渡久地港沖で、臨時徴用船彦山丸が米軍機に襲撃されて乗組員十数名が犠牲になった。その中に朝鮮人軍属の明長模（二六歳）さんと金萬斗（二三歳）さんがいた。

乗組員の遺体は、健堅海岸で火葬されて近くの畑に埋葬された。埋葬から四ヶ月後に米軍が撮影した埋葬地の写真が、当時の雑誌『LIFE』に掲載されている。海辺の丘に竹柵で囲んだ埋葬盛り土に一四本の墓標が一行に立てられ、所属・階級・氏名が記されている。墓標の下にはビール瓶？が転がっている。供養の品だろう。

日本に強制連行された朝鮮人の多くが差別され、酷い扱いを受けた。渡久地港でも日本兵が朝鮮人を虐待していたという証言があり、私は、彦山丸の朝鮮

人も粗末に埋葬されたと思っていた。

ところが、『LIFE』写真を分析するとまったく異なる結果になった。適当に立てたように見えた墓標の配列には、序列があったのだ。中央に①船長、船長の左右に②航海士と機関長、その左右に③事務員・上等水兵、さらにその左右に④機関部などの軍属、両端に⑤未成年という、階級と年齢による配列だ。朝鮮人の墓標は、未成年の日本人より上位で、④の序列に日本人とともに立てられていた。彦山丸の生存者が、二人の朝鮮人を差別せずに丁重に埋葬したようだ。

残念なことに、埋葬地周辺の風景が戦後の造成で様変わりしたため、大規模に発掘したものの埋葬跡は発見できなかった。代わりに、沖繩戦を先入観で見してしまう自分の発見があった。歴史の現場では、ステレオタイプの歴史観ではとらえきれないさまざまな場面があったのだろう。(二〇二〇年九月)

沖繩戦の遺骨収集と「戦死者の証言」

沖繩戦の「遺骨収集」を、ボランティアの方々が毎年行っている。頭が下がる思いだが、狸掘りのような遺骨収集をつづけてよいのか？考古学を学んできた者として疑問がある。

遺骨収集には、戦没者の慰霊と沖繩戦の実相を考えることで次世代の平和につながるという目的や、遺骨を遺族のもとに帰したいという思いがある。

しかし、遺骨収集の場所は戦争遺跡Ⅱ戦跡でもある。戦場の実態を解明するうえで重要な遺跡だ。そのために考古学による発掘調査が実施されている。発掘では、戦争の生々しい現場がタイムカプセルを開いたように地下から現れ、出土した遺骨については、その人が戦死に至った状況を考古学的証拠で解明する。これは、自らの死骨で語る「戦死者の証言」を聴き取る作業でもある。

しかも「一回限りの証言」だ。遺跡は、一度掘り返すと二度と同じ発掘調査ができない。その意味で、今の遺骨収集方法は、戦場の情報とともに「戦死者の証言」も永久に失う行為でもある。

「戦争体験者の証言」もあるが、世代交代による記憶の風化は避けられず、十数年後には、次世代が沖縄戦の実相を生で感じることができるのは戦跡だけになる。こうした重要性をふまえて、戦跡は、文化財保護法の埋蔵文化財として保護すべき対象になっている。

ただし、どの戦跡を埋蔵文化財と認定して発掘調査などの保護措置を行うかは各自治体が判断する。だから、遺骨収集の前に、地元教育委員会と遺骨収集について協議しなければならない。

地元教委が戦跡を発掘調査し、これに遺骨収集ボランティアが参加して、遺骨に「戦死者の証言」を添えて遺族に帰す方法もある。前回紹介した健^{けん}堅^{けん}の戦死者埋葬地発掘は、地元教委と調整のうえで考古学の方法で試みた遺骨収集だ。

また、戦跡は数に限りがあるので、あえて発掘せずに保存し、次世代が「戦死者の証言」を聴く機会を残すことも必要だ。「戦死者の証言」を永久に失わないためにも、遺骨収集の方法を見直してほしい。

(二〇二〇年一月)

首里城の大龍柱はどこに向いていたのか？

猛火に耐えた大龍柱。瓦礫と化した首里城正殿の前で直立する一対の〈向き合う〉大龍柱は、正殿とともに沖縄アイデンティティの象徴になった。この大龍柱を、令和の正殿復元では〈正面向き〉にしようという声が上がっている。

大龍柱の向きは、平成の復元直後から議論になった。復元を主導した高良倉吉氏は、詳細な図面がある一七八八年の修理記録をもとに復元したので、向き合いでよいとした。一方、大龍柱の制作を担当した西村貞雄氏は、明治の正面向き写真を根拠に、戦前、正殿を沖縄神社にした際の修理で狛犬風に向き合い

にしたから、正面向きに戻すべきだと主張していた。

焼失した正殿の再復元で、大龍柱正面論が再燃している。新聞論壇に、正面向き復元を求める署名サイトを立ち上げる投稿が掲載され、那覇市議会でも、正面向き復元に賛同する議員が、市の見解を質している。こうした主張の背景には、日本の神道的価値観で琉球文化の象徴が歪められたという思いがあるようだ。

しかし、大龍柱をどの向きにするかは歴史事実と復元方法の問題であって、アイデンティティの観点から署名を集めて変更を迫るような問題ではない。

復元正殿のモデルは、一七一五年建造の正殿だ（沖縄戦で焼失）。建造当初の大龍柱は正面向きだったが、一七六八年の改修で向き合いになった。同時に正殿の唐破風と正面向きの形を大きく変え、屋根瓦も当初の灰色瓦を赤瓦に葺き替えたようだ。一八四六年の修理も同様で、大龍柱が向き合いのまま王国は滅亡した（『沖縄県史 図説編 前近代』の拙論参照）。明治の大龍柱は、琉球処分

首里城に駐屯した日本軍が正面に向けた可能性が高い。

平成復元は、一七六八年修理以後の正殿と大龍柱を復元したものだ。一七一五年建造時の正面向きにするのも一つの方法だが、正殿の形も屋根瓦も再建当初の姿にする必要がある。灰色瓦の正殿で良いとしても、この時期の詳細な図面は残っていない。想像逞しく建築するほかはないが、これでは似て非なる正殿にしかない。

（二〇二〇年一月）

大龍柱問題と学術研究・世論・新聞報道

前稿で「大龍柱が向き合いのまま王国は滅亡した」と書いたが、これは訂正しなければならぬ。前稿掲載後の二〇二〇年一月に王国末期（一八七七年）首里城正殿の古写真が新たに確認され、大龍柱が台石の上で正面を向いていたことが明らかになったからだ。

ただし、この古写真の大龍柱の形は、正殿の復元年代（一七六八年）にまで遡らせることはできず、復元年代当時の大龍柱は台石上で向き合っていたというのが歴史研究者として私の意見（学説）だ。

さて、ここからが本題である。

王国末期古写真の登場で、大龍柱の復元をめぐる新聞報道と世論は、正面説に雪崩れ込んだ観がある。地元新聞は正面説を評価する社説を載せ、投稿欄にも正面説が「正しい」という主張が相次ぎ、ネットでも正面説を支持する書き込みで溢れた。正面説を主張する団体が、六千人余の署名を集めて国に対し正面向き復元を迫っていると新聞は大きく報じていた。

潮目が変わったのは二〇二二年一月三〇日だ。この日、国の「首里城復元に向けた技術検討委員会」は「報告会」を開催して、二カ年にわたる分析・検討結果を公開した（首里城公園ホームページで見ることができる）。私も委員の一人として九六ページの意見書を書いた。報告会参加者へのアンケートでは七六%

が「参考になった」と回答している。

「報告会」以後、新聞から正面説を支持する投稿が消えた一方で、正面説の主張と行動は先鋭化している。「報告会」資料にはデータ改竄・捏造による不正行為があると主張する論考を新聞に寄稿し、さらに新聞掲載を受けて国の委員個人に対する不正調査委員会の設置を大学や国に要求した（その後、この正面説研究者は自らの主張の誤りを認め、国・大学・新聞社に謝罪している）。

大龍柱の復元をめぐる経過をふり返ると、学術研究と世論・新聞報道の在り方について考えざるを得ない。対立する一方の学説を署名や世論という多数の力で支持し、これを議会という政治の力で「正しい学説」として決着させると、学術研究の独立は崩れ去ってしまう。新聞報道は、こうした社会の空気をつくり出したのではないか。

（書き下ろし）

ふっ き ぎ じ ゆ う ね ん き お く お き な わ こ ち
復帰五〇年の記憶—沖縄からの声

2022年8月10日 初版第1刷発行

編 者 川 満 信 一

発 行 者 藤 原 良 雄

発 行 所 株式会社 藤 原 書 店

〒 162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 523

電 話 03 (5272) 0301

F A X 03 (5272) 0450

振 替 00160 - 4 - 17013

info@fujiwara-shoten.co.jp

印刷・製本 中央精版印刷

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバーに表示してあります

Printed in Japan
ISBN978-4-86578-354-4